

令和4年度海外派遣研究員(短期B)報告

ーフィリピンの英語教育に関する調査ー

Overseas Research Report on English Language Education in the Philippines

秋葉 倫史^a

Tomofumi Akiha^a

Key words: Philippines, Hawaii, English Language School, Pidgin English

フィリピン・ハワイ・語学学校・ピジン英語

1. はじめに

英語学習は近年さらに重視されており、特に、話す・聞くといったコミュニケーション能力を向上させることが英語教育において非常に重要な課題となっている。語学留学は、実際の英語に触れられるため、コミュニケーション能力向上のための有用な学習形式の一つであると考えられている。語学留学先の中でも、フィリピン(セブ)留学は、立地や費用等の観点から、日本人の語学留学先として注目されている。

本稿は日本大学令和4年度海外派遣研究員(短期B)についての報告をするものであり、上記の背景から「フィリピンの英語教育に関する調査」をテーマとして、現地語学学校の実態、留学傾向の調査及び現地英語の特徴(特に言語変化の観点から)を調査した。また、フィリピンと他の地域の英語教育と比較するために、フィリピンと同様に多民族を背景とした英語使用が確認されるハワイを対象として関連施設を訪問した。派遣期間を通して、施設の視察・見学、関係者からの聞き取り、資料の閲覧・講読を中心にフィールドワークを実施した。

2. 派遣概要

2.1. 派遣先・期間

訪問地：フィリピン(セブ)・

アメリカ合衆国(ハワイ)

期間：全体： 令和5年2月22日(水)～
3月23日(木)

セブ： 令和5年2月22日(水)～
3月15日(水)

ハワイ： 令和5年3月15日(水)～
3月23日(木)

2.2. フィリピン英語研究の背景と派遣研究の目的

本研究課題「フィリピンの英語教育に関する調査」には、(i)フィリピンにおける英語教育の実態と留学先としてのフィリピンの可能性、(ii)フィリピン英語の言語的特徴、といった2つのテーマを下位区分として設定している。これらの先行研究として、(i)について、研修報告として教育の実態を記述した渡辺・羽井佐(2014)¹⁾では、フィリピンの語学学校の認知度や市場規模を前提に、現地語学学校の形態、カリキュラム、施設、教師について述べている。本研究では、渡辺らとは異なる施設を調査し実態の調査を

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

行った。また、フィリピンの留学の傾向については、渡辺・羽井佐(2014)¹⁾のように、フィリピン留学の認知度について触れられてはいるもの、留学の国際ハブとしてのフィリピンの実態・役割の研究については詳細になされていない。そのため、本研究ではセブにおける留学生について、セブの語学学校を選択した理由やセブと他の留学地の関連性といった留学傾向の調査を行った。なお、本多・鈴木(2007, 2009)²⁾³⁾では、ハワイにおけるピジン言語化された英語使用が論じられている。本派遣期間においても、フィリピンと同様に通時的に他言語接触の背景を持つハワイを対象とし、現地ローカル言語と英語の関連性、留学地としての特徴及びセブ留学との関連性も調査した。(ii)については、フィリピン語・タガログ語と英語の使用について調査した中原(2006)⁴⁾や、フィリピン英語と標準英語を比較し、語彙や文法の相違点を指摘した本多・鈴木(2009)³⁾、語彙的(認知意味論的)観点からの特徴について論じた三宅(2003)⁵⁾等があげられるが、これらにおいては、言語変化の観点からの特徴については十分に説明されていないため、本研究では、フィリピン英語における母語の影響及び言語変化の外的要因について検討することとした。

上記のように本研究課題に関する先行研究は複数みられるが、さらなる議論が求められる分野である。詳細な調査を長期的な目標とし、本派遣期間は、その基礎調査として、関連施設の視察、現地及び現地大学・図書館等での文献・資料購読及び収集を主として実施した。教育機関や該当者からの聞き取りを基に、フィリピン語学留学の実態と留学傾向を明らかにすること、また、現地の母語を背景とした特に文法レベルでの言語の特徴を記述し、先行研究で述べられる説明を現地の資料において確認することと新たな事実・観点を発見することをねらいとしている。

3. 視察・訪問先

3.1. SMEAGセブ校

今回の派遣の主たる視察先であるSMEAGセブ校に訪問した。こちらは著者の勤務校において外国人教師派遣の業務委託契約をしている株式会社アチーブゴール社がセブにおいて経営する語学学校となっており、現地コーディネーターのフクシマ氏よりカリキュラ

ム・施設等の案内を受けた。立地は、セブの行政機関が集まる中心地から近く、大規模ショッピングモールであるアヤラ・センター・セブも移動圏内となっている。訪問当時は、250名程度の学生が在籍しており、おおよその国籍分布は日本40%、韓国20%、中国15%、台湾5%、ベトナム5%、その他15%ということであった。カリキュラムとしては、セブの主流のスパルタスタイルで、早朝から夜まで、マンツーマンを中心とした(科目によっては少人数のグループワーク)授業が実施され、受講生個人の目標を達成する形で展開されていた。なお、目標到達度の測定については、主としてケンブリッジ英語検定が使用されていた。見学した授業では、アカデミックライティングが行われていたが、受講生・教師ともかなりの予習量があることが伺い知れ、添削においても複数のパターンが提示され、またその用法に関するディスカッションも高いレベルにて実施されていたのが印象的であった。



写真1 SMEAGセブ校：講師研修の様子
(2023年3月9日、筆者撮影)

ム・施設等の案内を受けた。立地は、セブの行政機関が集まる中心地から近く、大規模ショッピングモールであるアヤラ・センター・セブも移動圏内となっている。訪問当時は、250名程度の学生が在籍しており、おおよその国籍分布は日本40%、韓国20%、中国15%、台湾5%、ベトナム5%、その他15%ということであった。カリキュラムとしては、セブの主流のスパルタスタイルで、早朝から夜まで、マンツーマンを中心とした(科目によっては少人数のグループワーク)授業が実施され、受講生個人の目標を達成する形で展開されていた。なお、目標到達度の測定については、主としてケンブリッジ英語検定が使用されていた。見学した授業では、アカデミックライティングが行われていたが、受講生・教師ともかなりの予習量があることが伺い知れ、添削においても複数のパターンが提示され、またその用法に関するディスカッションも高いレベルにて実施されていたのが印象的であった。

も併設されており、生活全般には不自由しないようになっている。さらに、トレーニングルームやシアターといった、渡辺・羽井佐(2014)¹⁾らが指摘しているような、集中型学習に伴うストレスを軽減させるような娯楽施設も完備されている。なお、SMEAGの特色として、施設運営に関わる業務は基本的に外部委託しないことがあげられる。例えば、機材のメンテナンスや洗濯業務など専用の人員を確保して運営している。洗濯に関しては、洗濯籠に入れて自室の前に朝置いておけば、夕方には自室に届けられるというシステムである。この背景には、フィリピン独特の事情がかかわっており、外部業者に依頼した場合、対応に非常に時間を要することを要因としているとのことであるが、結果的に海外からの留学生においてはより快適な学習・生活空間の確保に繋がっている。

3.2. SMEAG ベイドリーム3校

SMEAG ベイドリーム3校はセブ校と同様にSMEAGの校舎の一つである。この校舎は、授業教室・宿泊施設の建物が現在建築中である。完成すると300人規模の留学生を収容できる予定である。先述したセブ校との棲み分けとして、この校舎はビジネス英語を中心に展開し、社会人や家族連れを生徒として想定しているとのことであった。関連施設として、レストラン部分は完成しており、訪問時においては一般に開放されていた。将来的には、広大な敷地内にマーケットなどの一般施設を設置し、また、ビーチにある船を用いて、セブで人気のアクティビティ等の業務も実施するといった、学校一帯を一つの街として完成することが想定されていた。



写真2 SMEAGセブ校：トレーニングルーム
(2023年3月9日、筆者撮影)



写真4 SMEAGベイドリーム3校：野外レストラン
(2023年3月10日、筆者撮影)



写真3 SMEAGセブ校：カフェテリア
(2023年3月9日、筆者撮影)



写真5 SMEAGベイドリーム3校：校舎建築中の様子
(2023年3月10日、筆者撮影)

3.3. QQ English ITパーク校

今回の派遣期間において、在籍した語学学校である。立地は海外の企業が集まるITパーク内に位置している。このエリアは、セブの中でも先進的な開発がなされた一角であり、インフラ等も新しく整備され、セブの中でも治安が良い地域である。多くの企業がオフィスを構え、ショッピングモール・ホテルをはじめとして、様々な施設がこの地域にまとまっているため、このエリアで生活が完結するようになっている。ITパーク校は、あるオフィスビルの複数フロアを使用している。そのため、SMEAG校や他の典型的なセブの語学学校とは異なり、宿泊施設を併設しているものの、提携したホテルなどから学校に通うなど、複数の選択肢がある。他の学校は施設内完結型であるが、ITパーク校は、エリア内完結型の学校といえる。

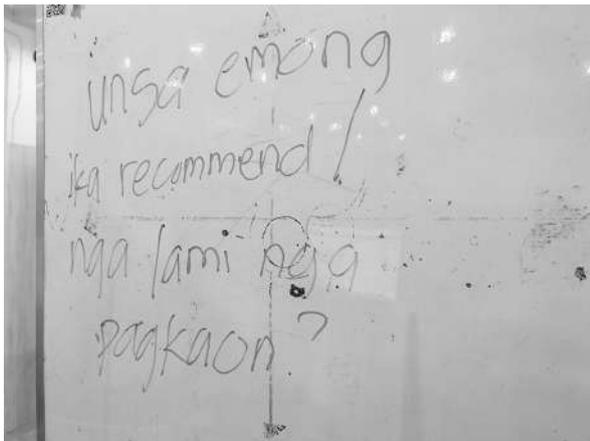


写真6 QQ English ITパーク校：英語とセブアノの混同によるヒアリング授業の板書
(2023年3月3日，筆者撮影)

授業を受ける個別ブースは400以上あり、そこで留学生に対する対面授業を実施するほか、世界中に向けてオンライン授業を配信する用途にも使用されている。パンデミック後の時期であったため、対面の留学生は200名程度とのことだが、コロナ以前はブースが埋まるほどの生徒数があったとのことである。留学生の割合は、日本企業のためであろうか日本人の割合が高い。ただ、他のフィリピンの語学学校と同様にマンツーマン授業のため、英語を話す時間は非常に多く確保できる。一方で、時代の変化に伴い、学生のスタイル・ニーズに合わせて個別に授業内容や時間割を選択できるカリキュラムとオンライン授業を併用することで帰国前後においても継続した内容を受講できるスタイルといった先行研究では説明されていない新たな知見も確認することができた。このようにセブの語学学校も近年多様化が進んでいることが確認できた。



写真8 QQ English ITパーク校：授業用ブース
(2023年3月1日，筆者撮影)



写真7 QQ English ITパーク校：併設ラウンジスペース
(2023年3月1日，筆者撮影)

3.4. セブにおけるその他の施設

セブにおいて複数の施設を訪れたが、本節ではそのうち顕著なものを紹介する。まず、現地の歴史的背景を知るために、サンカルロス大学と併設博物館及びスクボ博物館を訪問した。これは、言語変化の観点から言語を見るために、言語接触の外面史を探る目的があった。フィリピンは1500年代以降、スペインの侵略・統治があったため、まず現地語におけるスペイン語の影響が大きい。その後、近代においてアメリカの統治となり、英語が使用されるようになった。特にスクボ博物館では、それらの歴史的な変遷と複数の言語

資料を閲覧することができた。



写真9 サン・カルロス大学校舎内
(2023年2月27日, 筆者撮影)

現地英語の特徴に、母語がどのように影響しているかを知るために、まずは母語(セブアノ)の言語を検証する必要があった。セブアノについての文法書を探すため、セブシティ図書館を訪問した。そこで僅かな現地語の資料を閲覧することができた。しかし、セブアノ自体の体系的な文法書は見つけることができなかった。これは、母語の教育が十分でなかったことに起因している可能性はあるが、ヒアリングの結果から、フィリピンにおいては、近年母語教育の重要性の見直しがなされており、母語を扱う授業が展開されているとのことであった。今後、文法に関する教育資料を取集する予定である。



写真10 セブシティ図書館の様子
(2023年2月24日, 筆者撮影)

3.5. ハワイの訪問施設

ハワイにおいても、セブと同様の観点から施設を訪問した。まず、ハワイ大学マノア校及びその付属語学学校プログラム Hawaii English Language Program (HELP) の施設を見学し、施設や留学生の様子の確認をおこなった。セブにおいては、マンツーマンが特色だが、こちらは少人数グループワークを中心としたカリキュラムであった。留学生の年齢層については社会人が少ないように見受けられ、セブとの相違が認められた。



写真11 ハワイ大学マノア校：語学学校HELP
(2023年3月16日, 筆者撮影)

また、ハワイにおいても、現地の人々の本来の母語であるハワイ語の特徴とその英語への影響、また言語変化に影響を及ぼす外的要因の調査として、図書館・博物館(ハワイ大学図書館、ハワイ州立図書館、ビショップミュージアム)を訪問した。現地図書館では、第一に、母語であるハワイ語について書かれた資料や物語等について、ハワイ語と標準英語が対照されている文献を中心に閲覧し、先行研究に沿ってハワイ語の特徴について確認した。この点において、ハワイは母語を重視する政策を実施しているため、セブよりも比較的多くの母語を説明する資料を見つけることができた。また、ピジン化されたハワイ英語の語彙や文法についての資料も閲覧することで、本多・鈴木(2007)²⁾で指摘されるハワイ英語の特徴の一部も確認することができた。博物館の訪問では、展示物・資料より、様々な言語を背景とするハワイへの移民の歴史や、アメリカによる統治、マイノリティ言語となった

ハワイ語の言語教育政策等といったハワイ英語のピジン化に関わる外面史についても触れることができた。



写真 12 ハワイ州立図書館
(2023年3月20日, 筆者撮影)

4. アンケート結果の概要

フィリピンの語学学校において、小規模であるがアンケートを実施した。対象者はSMEAG・QQ Englishの日本人留学生16名である。①本人の属性（学生、社会人等）、②海外・留学経験、③セブを選択した理由、④今後の留学、といった項目に沿って調査を行った。セブ留学の実態及び今後の留学についての調査結果の概要は、以下の通りである。

まず、セブが選ばれる理由として、「費用が安い」「距離が近い」「マンツーマンレッスンが魅力的」が上位となり、セブ留学の印象については、回答者全員が「非常に満足している」「満足している」という結果となった。今後の留学予定については9割弱が「予定（希望）あり」と回答している。その留学先としては、「北米」「カナダ」「オーストラリア」といった母語として英語を使用する国あるいは地域が上位に挙げられている。

セブが選ばれる要因としては、先行研究等で述べられる結果と同様であるが、全員の満足度が高いことが示されたため、限定的な範囲ではあるものの、セブ留

学の有用性があると認められる。また、セブ留学者が将来のさらなる留学を希望し、英語を母語とする留学先を候補としている点は、セブが留学の足掛け（国際ハブ）としての役割を果たしている可能性を示唆している。

5. おわりに

今回は基礎調査のため、視察・見学、資料収集が主となり、またアンケートも小規模であったが、現地資料の閲覧、教員・留学生のヒアリングから、様々な観点が得られた。今回新たに得た知見を活用し、今後は本研究をより詳細に調査する予定である。具体的な研究テーマは、「フィリピン英語へのセブアノ語の影響について」及び「セブの留学先の可能性について」であり、後者については現地語学学校と協力し、より大きな規模でのアンケート調査を検討している。

参考文献

- 1) 渡辺幸倫・羽井佐昭彦：フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビューを手掛かりに、相模女子大学文化研究, 32：47-66, 2014.
- 2) 本多吉彦・鈴木邦成：ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性（Ⅲ）：ハワイ英語の文法体系を展望しながら、文化女子大学紀要, 15：65-74, 2007.
- 3) 本多吉彦・鈴木邦成：フィリピンにおける英語使用の現状：英語の国際化の流れを踏まえて、文化女子大学紀要, 17：119-127, 2009.
- 4) 中原功一郎：フィリピンにおける英語使用の現状と将来、日本実用英語学会論叢, 12：99-109, 2006.
- 5) 三宅ひろ子：アジアの「新英語」からみた言語意識教育の必要性—日本人大学生を対象としたフィリピン英語メタファー表現の理解度調査から—、アジア英語研究, 5：45-64, 2003.